



第四号
平成 29 年 10 月 31 日
大アジア研究会
〒 2790002 千葉県浦安市当
代島 1-3-29 アイエムビル 5

代表 折本龍則
副代表 小野耕資
顧問 坪内隆彦

国体の尊厳を取り戻し、

自主独立の元気を

奮い起こそう！

第四次安倍内閣の発足

先の総選挙で自民党が大勝利し、第四次安倍内閣が発足した。選挙前、安倍首相は、この度の解散を「国難突破解散」と命名し、核・ミサイル開発を続ける北朝鮮に対する外交政策への支持を国民に求めた。しかし「国難」を前にして、国民に外交政策への支持を求めるといふのも可笑しな話である。もし本当の「国難」なら、選挙などしている暇などあるまい。むしろ「国難」などというのは単なる解散のための口実であり、安倍首相は北朝鮮の脅威を利用して、内政の諸問題を覆い隠し、選挙での躍進を図ったのではなかったかと疑念が拭い去れない。

首相は、北朝鮮に対しては、最早対話ではなく圧力しかないと強調しているが、その圧力の内実は軍事的なそれではなく、あくまでこれまで続けて来た経済制裁の強化に過ぎない。

い。今年九月には、国連安保理で、対北朝鮮制裁決議が採択され、北朝鮮から石炭などの輸出が禁止されたが、アメリカの覇権に対抗するシナやロシアは、北朝鮮の体制崩壊や暴発を望んでおらず、北朝鮮への石油供給も「現状維持」に止まるなど、北朝鮮の対外政策を變更させるレベルには達していない。こうしたなかで、北朝鮮は着々と核・ミサイル開発を推進し、核弾頭の小型化と、アメリカ本土に到達可能な弾道ミサイルの開発に成功し、アメリカに対する核抑止力を確立するのは時間の問題と見られている。

残念ながら、我が国による如何なる経済制裁を以てしても、北朝鮮の核武装を止めることは出来ないものであり、これに対する唯一の対抗策は、我が国もまた核・ミサイル開発を断行して核抑止力を構築する以外にないのである。しかるに、安倍首相は、現行の核不拡散条約体制にしがみつき、原発の再稼働は断行する一方で、何の効果もない経済制裁を「圧力」と称して国民を瞞着し、実際には、隣国が核武装するのを指を咥えて見ているだけで

ある。アメリカが北朝鮮を軍事攻撃するシナリオもあるが、一度米国本土を射程に収める大陸間弾道ミサイルが完成してしまえば、米朝間に相互核抑止が成立し、アメリカは北朝鮮を攻撃することができなくなる。その場合、北朝鮮による恫喝に対しても、我が国はアメリカの抑止力に頼ることができなくなり、外交的な屈服を余儀なくされるだろう。

自主独立の気概なし

本来北朝鮮の脅威の増幅は、我が国が自主防衛体制を確立し、米国の軍事的保護下から脱却する千載一遇のチャンスである筈であるが、我が国世論の動向を見ても、自主独立の気運は払底し、むしろ安倍首相は、トランプ大統領の当選早々、貢物を持ってニューヨークに馳せ参じる体たらくである。何故、かくも気概なきや。それは我が日本国民が、戦後の自虐史観に脳漿を冒され、畏くも聖上を主君に仰ぐ我が国体の万邦無比にして尊厳なる所以を解さないからである。真摯に天壤無窮の神勅を奉じれば、我が国体における君臣の分、内外の別は自ずから分明であり、国民が主権者を僭称し、「日米同盟」の名の下に、数万もの夷狄の軍隊が国土に蟠踞する状況は断じて許されない筈である。しかるに我が国民は戦後民主主義の中で、「自由と民主主義」を万国普遍の価値と誤信し、その価値の中心であるアメリカを、宗主国のように崇めている。このように、我が国によるアメリカへの

臣従は、国体観念の喪失と「自由と民主主義」への妄信に起因するものである。

遑れば、江戸時代の徳川幕藩体制においても、我が国では、シナから受け入れた孔孟程朱の学を妄信するあまりに、シナを「中華」として尊貴となし、自国を「東夷」として卑賤となす弊風が瀰漫したことがあったが、山崎闇齋、君臣の大義、内外の別を高唱して、国体の尊厳を明らかにし、もし孔孟が我が国を攻めてきたら、一戦相まみえて生け捕りにしてしまふのが孔孟の道であると喝破した。この国体の尊厳に発する独立不羈の精神こそ、明治における国家隆盛の基であり、玄洋社の来島恒喜をして大隈外相に爆弾を投擲せしめたものに他ならない。



したがって、いま我が国民に必要なことは、「自由と民主主義」への妄信をすて、君臣内外の分別を正して、国家独立の精神的根基を確立することである。それなくして真の「国難突破」など出来得る筈がない。

玄洋社と久留米藩難事件

坪内隆彦

明治四年の久留米藩難事件は、西南戦争に至る第二維新運動の魁であった。当時、久留米藩では、明治維新の貫徹、政権打倒を目指し、四国、中国、京都、東京、さらに秋田まで同志を広げる動きがあった。政権に対する不満の要因は多岐にわたるが、筆者が特に注目するのが、明治政府の「西洋心酔」である。

事件に関与した寺崎三矢吉の手記には「京都同志が青蓮院宮を奉じ久留米に下向して義兵を挙げ、西洋心酔の政府を倒壊せんと決議せり」とある。それは、明治維新の原動力となった崎門学や水戸学の思想に基づいた政権打倒運動であった。

この政権打倒運動台頭のきっかけの一つは、明治二年十一月、長州藩が政府の兵制改革に従い、従来の諸隊を解散し、新たに常備軍の編成を決定したことにある。不平兵士二千人余は山口から防府方面へ脱走して反乱を起こしたのである。この反乱の首謀者とみなされたのが、大楽源太郎である。彼は、大村益次郎暗殺への関与も疑われていた。藩庁から出頭を命ぜられるに至り、大楽は山口から脱走、各地で身を隠し、明治三年四月久留米藩領内に潜入した。このとき、大楽が頼っていたのが、政権打倒を目指していた古松簡二らであった。古松の指示で、大楽を匿ったのが

小河真文や寺崎三矢吉であった。

これに対して明治政府は、四条隆調陸軍少将に久留米の反政府勢力鎮圧を命じた。四条少将は明治四年一月二日久留米入りし、次々と容疑者を検挙していった。

久留米の維新貫徹派たちは、大楽が捕らえられ、彼の口から反政府拳兵の計画が洩れては、藩主の身に禍が及ぶと判断、やまなく大楽暗殺を決意した。三月十六日、大楽は島田莊太郎、川島澄之助以下十四人によって殺害された。その際、同志たちの拠点となったのが、本荘一行の自宅であった。

結局、久留米の維新貫徹派は次々と投獄され、明治四年十二月に判決が下された。小河真文は斬首、古松簡二は死一等を減じて終身禁獄、寺崎三矢吉も終身禁獄となった。さらに、久留米の維新貫徹派と通じていた従四位愛宕通旭・従四位外山光輔の両卿は士族に降されて切腹した。

久留米の維新貫徹派の思想については稿を改め、ここでは久留米藩難事件関係者と玄洋社の関係に注目したい。

そもそも、玄洋社として結実する福岡の自由民権派には、明治十年の西南戦争に呼応しようとした志士がいた。しかも彼らは、西南戦争の魁である久留米の維新貫徹派とも出会っていた。

玄洋社初代社長を務めた平岡浩太郎もその一人である。彼は、西南戦争に呼応して越智彦四郎、武部小四郎等が拳兵（福岡の変）す

ると、これに加わった。その後、单身西郷軍に合流したが、敗戦後、東京の獄に懲役一年の刑を受けた。ここで出会ったのが、久留米の維新貫徹派・古松簡二であった。平岡について『東亜先覚志士記伝』は次のように記している。

「在獄中、同囚たる古松簡二、大橋一蔵、三浦清風、月田道春等に接して読書修養の忽せにすべからざるを悟り、歴史、論孟、孫呉等を研鑽する所あつた」



平岡浩太郎

一方、玄洋社社員であり、日清戦争での陸軍通訳を経て、義和団の乱、日露戦争、辛亥革命などで裏面工作に従事した本城安太郎もまた、獄中で古松簡二と出会っていた。『東亜先覚志士記伝』は、本城について次のように記している。

「明治九年十七歳の弱冠にて越智彦四郎の旨を承け、東京に上つて機密の任務に奔走したが、是れは越智等の一党が鹿児島私学校党に策応して事を挙げんとする準備行動であったので、後ち計画が暴露するに及び捕へられて獄に下つた。この獄中生活は従来学問を軽

んじて顧みなかつた彼に一転機を与へることとなり、獄裡で同獄の古松簡二等の手引きにより真に血となり肉となる学問をしたのである」

久留米の維新貫徹派との機縁を持ったのは、平岡、本城だけではない。内田良平らとともに日韓合邦運動に挺身した武田範之の父・沢之高は、久留米藩難事件に連座していた。武田らは、島田莊太郎、川島澄之助とともに大楽暗殺に関与した松村雄之進のもとに集結していた。

一方、昭和維新のイデオログ権藤成卿の父直は久留米藩難事件関係者と親交があった。その一人が、大楽暗殺の際の拠点として自宅を提供した本荘一行であり、若き日の権藤は大阪にいた本荘のもとに実業見習いに出されていた。

玄洋社の思想を考える上で、西南戦争に遡り、さらに久留米藩難事件にまで遡って考えることが重要なのではなからうか。



久留米藩難事件関係者の墓碑

アジア主義に生きた杉山家の伝承④

杉山満丸

昨年十二月孫文生誕百五十年を記念して香港・広州を旅する機会を頂きました。

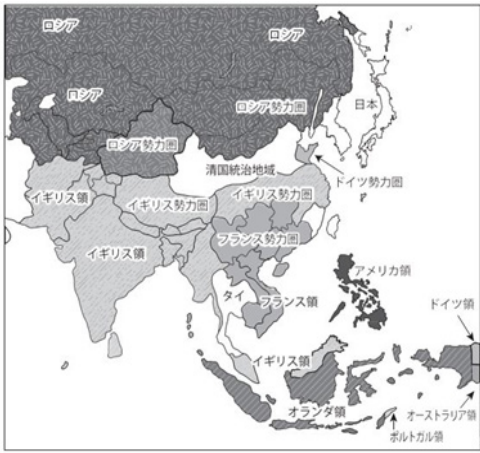
その際に、私たち一行に同行し、お世話をいただいた香港の実業家の方から

「日本人はなぜ孫文を支援したのですか？」という質問を戴きました。

実はこの質問は、日本の方からもよく投げかけられるものです。

私は、躊躇なくその時に持参していた拙著「ふたつの悲しみ秘話」に掲載している

「明治後期のアジア勢力図」(左図)(白い地域がアジア人が統治している地域)を示して、



「中国も朝鮮もタイも西洋列強の植民地になっってしまった、アジア人が治める国が日本だけになった時に日本は独立を護れると思いませんか？」と質問を返しました。

※「ふたつの悲しみ秘話」には杉山家に遺されていた「中国革命日本人支援者名簿」(浦辺登氏監修)が掲載されています

すると、その香港の実業家の方は、苦笑いしながら「無理だと思えます」と言葉返され、その後、笑顔になり吹っ切れたように明るい雰囲気になって、旅行中非常に親しくお世話をいただきました。

香港にも広州市にも広州市にある中山大学(孫文が創立した嶺南大学が発展し、中山大学になったが、中山大学ができた後、嶺南大学を中山大学の中に復活し、中山大学の中で、特に優秀な生徒が学ぶのが中山大学の中の嶺南大学となっているそうです)にも「中山(孫文)記念館」があり、そこを訪問すると、各館とも、孫文を支援した日本人の写真が数枚展示されています。そして、各館とも、日本

人と孫文の交流資料がほしいとお言葉を頂きました。(左の写真は右上から、中山大学孫中山記念館、右下は、そこに掲示してある宮崎寅藏の写真、左上は孫文銅像、左下は、中山大学前景)



中国では、昔の資料や建築物を積極的に遺す方向に動いているとはつきりと感じた旅となりました。日本では、孫文との交流資料は、一部の有名人を除いて、散逸が止まらない状況にあると思います。今年三月には、孫文と親しく交流した、末永節氏の家が解体され、駐車場になりました。末永節旧宅には、孫文

本号目次

- 一面 巻頭言 (折本龍則)
- 二面 玄洋社と久留米藩難事件 (坪内隆彦)
- 三面 アジア主義に生きた杉山家の伝承④ (杉山満丸)
- 六面 「漢口楽善堂の人々」 (浦辺登)
- 八面 右翼から国士へ (小野耕資)
- 十一面 『アジアの夜明け』② (原作・草開省三) 要約・原嘉陽
- 十五面 樽井藤吉と明治維新発祥記念碑 (仲原和孝)
- 十六面 書評・浦辺登著『玄洋社とは何者か』 (小野耕資)
- 十七面 史料・「中野正剛氏との最期の会見の思出(昭和二十年十月一日記)」
- 十九面 連載 大亜細亜医学の中の日本④ (坪内隆彦)

が隠れていた部屋が遺っていたということだ。福岡市博物館の学芸員の方に電話でお伝えすると、落胆の声が返ってきました。

関係各家で保管されている資料や建物は、歴史の事実を示す貴重な物言わぬ語り部です。その語り部である資料が日本では、散逸を続け、中国では、各資料館や大学が積極的に収集を行っています。これは、時間の経過とともに大きな差となって表れてくることでしょう。私が住んでいる福岡では、次々と古い建物が取り壊され、福岡市立総合図書館も福岡市立博物館も寄託を取りやめると聞きました。私の家の資料は、福岡県立図書館と九州大学記録資料館に寄託させていただいております。しかし、寄託資料にも贈呈資料にも問題点があります。

私が昨年東京でお聞きした話ですが、海外の博物館や図書館、資料館では、寄託資料を積極的に活用し、〇〇展のようなものを企画し売り込みを図ります。その企画展の収益は、寄託者と館で分けるそうです。そのため、次から次へと寄託者が現れ、資料が充実してゆくとともに館の運営も税金に頼らなくてもいい部分が大きくなっていくそうです。日本ではどうでしょう。私を知る限り、次のような状況です。寄贈資料・・・寄贈資料は完全に館のものとなり、学芸員が自由に取り扱います。

例えば、ある作家の蔵書が寄贈されたとします。作家の研究者からすると、作家の蔵書

がまとまってあることが重要になります。ところが、蔵書の中にすでに館にあるものがあれば、それは不要ということで抜き取って廃棄されることがあります。また、一般の書棚に移され、自由に貸し出しに供されることもあります。それに対して、寄贈した後は、遺族は一切の口出しができません。また、廃棄する場合も、遺族に相談があることはありません。今年、京都で、貴重資料が一括して捨てられた事件は記憶に新しいところであると思います。

寄託資料・・・寄託資料は預かるだけで、そのまま死蔵されることが多いようです。館の資料ではないので、積極的に世に出すことはできないようです。

そこで、遺族が資料展を開催しようとするとうなるでしょうか？

資料展を開催するためには人件費、開催場所の賃貸料、輸送費、パンフレット代などが必要になります。ところが、寄託資料なので、寄託者である親族は、一切お金を取ることが禁止されています。一〇〇%自腹を切つて資料展を開催しなければならぬのです。

第三者の場合はどうでしょう。寄託者の許可が得られれば、資料を借り出して、資料を利用して資料展示をしてお金儲けをすることに、一切制限はありません。第三者の方は、寄託者をうまく利用して企画すれば、収益を上げることができるのです。

寄贈でも寄託でも言えることなのですが、

寄贈や寄託を受け入れるときに担当した学芸員が転動したり、部署が変わったり、引退したりすると、次に担当する学芸員が資料の価値を理解していない、興味を示さないこともあります。その場合、廃棄されたり放置されることがあります。杉山家資料は、最初に寄託した場所で、三年間は当初の興味を持って学芸員の方が予算をつけて資料の整理をしていたのですが、その担当者が転動で他の部署に移つてからは、そのまま十年間放置されました。

私は、資料館や博物館や図書館が遺族から積極的に資料を収集し、企画展が行えるように法律が改正され、館も遺族も両方が潤い、多くの人々が真実の歴史に触れる機会が増えるような法律改正を希望します。それにより、貴重な資料が廃棄されずに寄託されることを祈念いたします。

話を元に戻しましょう。中山大学では、学長と夕食を共にしながら懇談する機会を戴きました。

私は、学長との会話の中で、「孫文を支援した日本人の多くは陽明学を学んでいました。玄洋社を創った人々や私の家と申し上げたところ、陽明学を理解いただいたのは学長のみで、同席していた若い大学の先生たちは陽明学に反応できない状態でした。私は、儒教の本場、中国での儒学の後退は本当なんだと実感しました。

ところで、現代では「アジアの盟主中国」であるとか「アジアを牽引するリーダー日本」などという言い方が使われています。アジアの解放を目指した孫文や日本でアジア解放を目指して活動した人々は、このような言い方とは思いますが、私の家に伝わる話ではそのような感じは受け取れません。私の父、杉山龍丸の生き様からもそのような感覚は全く感じることではできません。

孫文が一九二四年（大正十三年）に神戸で行った東洋の王道、西洋の霸道という演説で、孫文が示唆したのは、特に日本の軍部を中心とする人々の行動が当初のアジア解放の理念から変化し始めたことに対するものではないかと思えます。現代では軍勢力や経済力を利用した霸道がはびこっていますが、霸道が限り限り征服者と被征服者ができ、紛争は収まらないでしょう。王道、もしくは皇道こそが、世界平和の道ではないかと思うのです。

夢野久作によれば、王とは天地人を貫きすべの人民から支持される道。そして、皇はその上に白という字が載っています。白はあらゆる光が合わさって初めて生じる色。すなわち、世界中のあらゆる人種の人々が平和に暮らせるような世の中になるように努力する道です。私の知人の九十年代の方から、「日本人が目指すべきは、西洋の裏か表、勝ち負けの世界ではなく、あいこがあるじゃんけんぼん

の道だよ」という話を戴きました。

夢野久作が、私の父に教えた「天皇も勤皇、幕府も勤皇」というのはそういう意味ではないかと思うのです。

真のアジア主義とは王道であり皇道でなければならぬのです。だからこそ、日本の先人たちは、アジアの人々と深く太い絆を創ることができたのだと思います。

中国を訪問した時に、中国の方から、「孫文は日露戦争で、日本がロシアに勝った時に「わたしでもやれる」という気持ちになった。日露戦争での日本の勝利は孫文に大きな勇気を与えたんですよ」というお言葉を頂きました。これは前に書いた福岡アジア大賞を取られたアシシユ・ナンディ氏の言葉、

「日露戦争で日本が勝利した時に、インドの街々が、アジアの街々が、すごいことになったのを日本人は知らないでしょう。インド独立運動に参加した人々の多くは、日本がロシアに勝利したと知って、アジア人でも白人に勝てる確信し、自信を回復し、独立運動に参加する決断をしたのです。ネルーもその一人です」と共通するものです。

孫文が神戸で行った演説の一部を抜粋します〔日露戦争と亜細亜民族の興起〕

私はこれに関して親しく見たことをお話する。日露戦争の開始された年、私は歐洲にゐたが、或る日、東郷大將が露國のバルチック艦隊を全滅させたことを聞いた。この報道が歐洲に伝はるや、全歐洲の人民は、恰も父母

を喪つたが如くに悲しみ憂ひ、英國は日本の

同盟國でありながら、大多数の英國人は眉をひそめ、是がかくの如き大勝利を博したことは決して白人種の幸福を意味するものでないと思つた。正に血は水よりも濃しの觀念である。

歸途私はスエズ運河を通ると、沢山の土人（注・現地人）―それはアラビア人だつたが―は、私が黄色人種であるのを見て「お前は日本人か」と問ひかけた。私は「さうでない、私は中国人だ何かあつたのか、どうしてそんなに喜んでゐるのか」と問ふと、彼等は「日本は露西亜が新に歐洲より派遣した海軍を全滅させたと聞いたが、それは本当か、自分たちはこの運河の両側にゐる露西亜の負傷兵が船毎に送還されるのを見た。

これは必定、露西亜が大敗した証拠だと思ふ。以前は吾々有色人種は何れも西方民族の圧迫を受け、全く浮ぶ瀬がなかつたが、此度日本が露西亜に勝つたといふことは東方民族が西方民族を打破つたことになる。日本人は戦争に勝つた。吾々も同様に勝たなければならぬ。これこそ歡喜せねばならぬことではないか」といふのであつた。

これを見ても日露戦争が亜細亜全体に如何に大きな影響を与へたかが判る。日本が露西亜に勝つたことは、東方にゐた亜細亜大はそれほど感じなかつたかも知れないが、西方にゐる常に歐洲人から圧迫を受け、終日、苦痛を嘗めてゐる亜細亜大がこの戦勝の報を聞いて

て喜んだことは異常なものであつた。

日本が露西亜に勝つて以来、亜細亜全民族は歐洲を打破らうと考へ、盛んに独立運動を起した。即ち、波斯（ペルシャ・現在のイラン）、土耳其（トルコ）、アフガニスタン、アラビア等が相繼いで独立運動を起し、やがて印度も運動を起すやうになつた。

亜細亜民族は、日本が露國に勝つて以来、独立に対する大なる希望を懐くに至つたのである。蘭来二十年に過ぎぬが、填及、土耳其、波斯、アフガニスタン及びアラビアの独立が相次いで実現したばかりでなく、印度の独立運動も亦漸次發展し來つた。

二〇一七年十月一日、作家の浦辺登さんは、友人から頼まれて、広州から來られた中国人の方を福岡市内の孫文と關係が深い場所へと案内されました。その歸りに博多駅のKITTE（マルイ）で行われていた「ミニ夢野久作展」の会場を訪問していただきました。私が、会期終了後の撤収作業をしていたためです。その会場で、その中国人の方は、夢野久作の軍服姿を見られて、「なぜ、あなたのおじいさんは軍人になられたのですか？」と質問されました。



夢野久作



私は、次のように答えました。

私の曾祖父・杉山茂丸は孫文をはじめ、アジアの独立運動に関係した人々と交流していました。例えば、日本政府は孫文に対して、革命が成功し高い地位にあるときには国賓として厚遇し、その後、袁世凱に負けて神戸に來た時には上陸を拒否しています。これが一般的な政府（政治家や官僚）の対応です。アジア主義の人々（民間主体）は政府が国賓にしようが入国拒否に使用が一貫して孫文を支援しています。

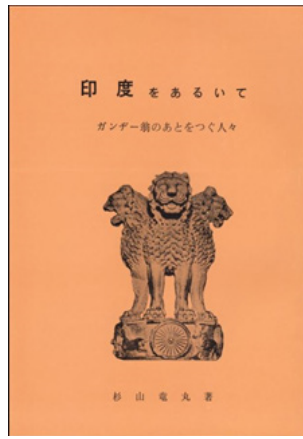
そのため、政府が孫文の入国を拒否している時期には警察や公安の捜査対象となるのです。同じように、インドのラス・ビハリ・ボースも政府は日英同盟中であつたことから、ボースを国外追放にします。香港行きに船しか出向予定がない時期を狙つてその処分が行われたと伝わっています。ボースを匿したり逃がした人々は、警察や公安の捜査対象者となりました。

夢野久作が志願したのは近衛第一連隊です。近衛師団は天皇陛下を護る部隊です。近衛師団から入隊を許可されたということは、天皇がその人物が安全と認めたことになり、簡単に警察や公安が手を出せなくなり、また、廢嫡にする際は精神病患者に仕立てるといふこともあつたようですが、これも、近衛師団にいたことによつて不可能になりません。

このような点を考えて、茂丸は久作に近衛

師団に入ることを命じ、久作もその指示に従ったのだと伝わっています。同じ理由で、久作の長男・杉山龍丸も陸軍士官学校に入學しています。戦後、龍丸は、インドに渡航を希望しましたが、危険人物とみなされ、三年間パスポートを発行してもらえなかったそうです。毎日毎日、福岡東署と中央署、そして、県の公安が来たと言っています。

「私は曾祖父・茂丸と違って技術者である。純粹に技術指導のためにインドに行くのである」



「印度をあるいて」

三年間繰り返し返された問答の末に、パスポートが発行され、父・杉山龍丸は初めてインドを訪問し、ガンジーの教えを広めるブータン運動を牽引していたヴィノバー翁らから大歓迎を受けます。そして、一ヶ月にわたりヴィノバー翁と行動を共にしました。帰国後に書き遺したのが、「インドを歩いて」です。

もちろん、犬養毅に代表されるように、政府や官僚にも協力者はいましたが、「真のアジア主義は、民間人に身を置くものでなければなしえなかった」ということを、ご理解い

ただければ幸いです。身の安全の保障もなく、経済的保証もなく、アジアの独立運動に協力した人々の活動が、陽の目を見ることを切に希望します。

漢口楽善堂の人々

浦辺登

中国（辛亥）革命は孫文が主導したものと一般に認識されている。しかしながら、この革命の火付け役は日本人だった。その目的は、中国（当時は満洲族の清国）の政治改革を推進しなければ、アジア全体の安寧は得られないとの強い決意からだった。

まず、志を持った日本人たちが大陸に渡る。政治改革に取り組む中国人同志を訪ねて廻る。同時に、経済的な自立ができなければ、国家は維持できない。そこで、その基盤となる市場調査を行なった。その拠点となったのが漢口楽善堂であり、後に、日清貿易研究所へと発展する。その苦難の道を選択した若者たちを漢口楽善堂を中心に再確認したい。

漢口楽善堂と岸田吟香

漢口楽善堂は、上海から奥に入った漢口という都市に設けられた。上海で薬品、書籍販売をしていた岸田吟香（一八三三〜一九〇五年）だが、意気投合した荒尾精（一八五九〜一八九六年）を楽善堂の漢口支店責任者に仕立て上げた。



岸田吟香

漢口は地図で確認すると、大陸の中央部に位置している。長江（揚子江）河口の港湾都市上海から、南京を経由し、さらに奥へと入ったところにある。ここで、注意を要するのは「南船北馬」という言葉があるように、上海からは縦横無尽に運河が発達している。南京から北京まで運河が通じており、南京船（内江船）と呼ばれる船が運河を自在に上り下りしている。この南京船は東シナ海にも乗り出し、長崎にも来航していた。

この南京と北京を往復する運河は呉の時代の煬帝時代（六〇四年頃）に改修工事が行なわれた。（『鎖国の地球儀』松尾龍之介 著）

荒尾精の盟友であり、日清貿易研究所の生徒舎監であった宗方小太郎（一八六四〜一九三三年）の日記を読み進むと、船で運河を昇り降りして大陸の情勢を詳しく報告書にまとめている。永い歴史を誇り、広大な面積を有する中国を踏査するにあたり、漢口に拠点を置いたのは先見の明があったと言って差し支えない。（『宗方小太郎日記』大里浩秋

著）

ちなみに、漢口楽善堂の活動を支えた岸田吟香について、少しく紹介をしておきたい。岸田は備前（岡山県）の出身だが、岸田自身よりも息子の画家・岸田劉生（一八九一〜一九二九年）の方が世間ではよく知られている。岸田劉生の「麗子像」は美術の教科書で一度は目にされたのではないだろうか。

岸田吟香が荒尾精を精神的にも物質的にも支援することができたのは、岸田が目薬販売で大成功をおさめたからだ。嘉永六（一八五三）年、ペリー来航によって日本は開国の途を選択せざるを得なかった。このことで、開港地横浜には欧米の使節、商人、宣教師などが居住していた。なかでも、アメリカ人宣教師で医師のヘボン（一八一五〜一九一一年、James Curtis Hepburn）本名はヘップバーンだったが、日本人にはヘボンと聞こえる）は、西洋医学を駆使して日本人の患者を診察していた。岸田吟香もその眼科治療を受けた一人だった。

その岸田吟香はヘボンの治療を受ける傍ら、ヘボンが進めていた聖書の翻訳、印刷業務を手伝うことになった。この印刷を行うために、岸田は一時、ヘボンと上海に出かけもいる。

そして、ヘボンから目薬の製造法を伝授され、「精綺水」という名前前で販売したところ、爆発的な売れ行きをみせ、財を成した。これにより、岸田は上海にも店を出し、中国でも

売れ行きは好調だった。この岸田がいなければ、はたして、漢口楽善堂が機能を果たすことができたか否かは不明である。

漢口楽善堂の伊集院兼雄

この漢口楽善堂は、いつ頃に開設され、荒尾精以外のメンバーはどんな顔ぶれだったのかを探ってみよう。

大里浩秋氏の『漢口楽善堂の歴史(上)』によれば、明治一九(一八八六)年春、前任の伊集院大尉(伊集院兼雄、変名は三河臥水)と荒尾中尉(荒尾精・工兵中尉、参謀本部長)とが交代したと記されている。従来、漢口楽善堂は荒尾精が開設したものと巷間伝わるが、伊集院兼雄大尉が先行していた模様だ。明治一九(一八八六)年八月、長崎港で清国北洋艦隊の水兵が騒乱事件を起こした。これは「長崎事件」とも「清国水兵騒乱事件」とも呼ばれる。この年に漢口楽善堂が活動を開始したとすれば、日本と清国との関係は緊張状態にあったと見てよい。

次に、荒尾精の前任者といわれる伊集院兼雄(一九〇四年、鮫島兼雄とも)は、明治七(一八七四)年に鹿児島県士族から陸軍少尉候補として工兵科に属した。明治一二(一八七九)年に参謀本部に所属して測量課員となり、以後、朝鮮、満洲、清国(中国)を踏査している。明治一九年春に荒尾精と交代したというのも、伊集院が欧米視察に出かけたことによるものようだ。

いずれにしても、従来、漢口楽善堂は荒尾精が責任者であったと伝わるが、前任の伊集院が明治一七(一八八四)年に開設し、岸田吟香の支援を受けていたものと思われる。これらは、今後の研究課題として注意深く見ていきたい。

漢口楽善堂に集った人々

漢口楽善堂の活動に参加した人々は、二十人余とも三十人余ともいわれる。正確な員数については把握できていない。しかしながら、判明している名前を挙げると次のようになる。

・井深彦三郎 ・高橋謙 ・宗方小太郎
・山内崑 ・浦敬一 ・山崎恙三郎
・藤島武彦 ・中野二郎 ・中西正樹 ・白井新太郎 ・石川伍一 ・片山敏彦
・緒方二三 ・井手三郎 ・田鍋安之助
・北御門松次郎 ・広岡安太 ・松田満雄
・荒賀直順 ・前田彪 ・大屋半一郎 ・河原角二郎(角太郎とも) ・高橋源助
・黒崎恒次郎 ・田川 ・姫田 ・小城
さらに、阿部野利恭 ・浅野徳蔵が確認でき、総計二九名になる。

玄洋社と漢口楽善堂の人的関係

この漢口楽善堂に参加した人々の中で玄洋社と関係のある人物がいる。

まず、山崎恙三郎(やまさき・こうざぶろう)は玄洋社員名簿に記載されており、日清

戦争での英雄として知られる。

「東京に遊学し、英語を学ぶ。明治二年漢口楽善堂に投ず。日清戦争の軍事探偵。清国兵により処刑される。明治二十七年一月三日没。年三一。」との記述がある。(『玄洋社・封印された実像』石瀧豊美 著)

先述の大里浩秋氏によれば、山崎は元治元(一八六四)年七月四日、福岡藩士の家に生まれた。明治の初め、鞍手郡山口村(福岡県)に移り、鞍手の中学校を卒業し、一七歳か一八歳のころに福岡で儒学と英語を学んだ。玄洋社の少壮連中と交遊し、此時代に大陸経綸の志を養成した。

明治一八年に上京、当時の日本は国会開設が数年後に迫っていたために内政に心を奪われ、支那(中国)問題を口にする者となかった中で荒尾精のみが唱道していたのに共感を覚え、意気投合し、支那大陸に渡ることを決意した。浦敬一、北御門松次郎らと大陸に渡つたのは明治二〇(一八八七)年一〇月のことと記されている。

そして即座に漢口楽善堂に入った。次に、中野二郎である。

この中野二郎(一八六四〜一九二七年)は、本名よりも号の中野天門のほうで知られる。『玄洋社社史』の緒言にも福島県人中野天門として登場し、社員ではないものの、玄洋社との関係の深さを窺い知ることができる。

中野は元治元(一八六四)年、会津藩士・中野喜通の次男として会津若松に生まれた。

明治一二(一八七九)年に上京し、岡千仞(一八三三〜一九一四年、仙台藩士、漢学者)の下で学び、東京師範学校速成科に入学している。明治一七(一八八四)年に同郷の柴四朗(一八五三〜一九二二年、会津藩士、ペンネームは東海散士)の紹介で上海の東洋学館に学んだ。

その後、東洋学館が閉鎖されると哥老会(農民主体の秘密結社、反満洲族、辛亥革命に貢献)と小沢豁郎(一八五八〜一九〇一年、清仏戦争に乗じて清国に革命を起こすことを企図、東邦協会発起人)中尉が提携した政治運動に参加した。

略歴としては以上になるが、中野が漢口楽善堂に加わったという記述はなたいため、哥老会と小沢豁郎中尉の政治運動の基点を漢口楽善堂に置いていたものと推察される。中野はこの小沢との清国改造革命での蜂起計画に参加し、九州各地を遊説していた。この時、頭山満(一八五五〜一九四四年、玄洋社)、平岡浩太郎(一八五一〜一九〇六年、玄洋社初代社長)と知り合ったとある。

しかし、中野が入学した東洋学館の設立には平岡浩太郎が関係しており、九州遊説前には頭山、平岡という玄洋社人脈との関係が誕生していたと見るほうが無難と考える。

東洋学館について

玄洋社初代社長を務めた平岡浩太郎は、明治一五(一八八二)年頃から対外硬運動にか

かわった。支那（中国）大陸に足場を固めるきつかけになったのは、明治一七（一八八四）年、上海に東洋学館を設けてからである。

一般に、漢口楽善堂から日清貿易研究所、東亜同文書院という流れと思いがちだが、東洋学館は漢口楽善堂より先になる。東洋学館は明治一七（一八八四）年、中江兆民（一八四七

）一八〇一年、篤介とも）、平岡浩太郎、末広重恭（一八四九〜一八九六年、鉄腸とも）、樽井藤吉（一八五〇〜一九二二年）らが上海に開いた学校である。中国語や習俗を学び、先述の中野二郎（天門）、宗方小太郎（一八六四〜一九二三）、山内崑（一八六四〜一九二六）などの学生がいた。玄洋社（自由民権団体）、熊本相愛社（自由党系民権結社）、熊本濟々齋（佐々友房が創立した学校）から学生を送り込み、越前福井の杉田定一（一八五一〜一九二九、自由民権運動家）も創立を支援した。この創立メンバーを見ると、自由民権運動で結びついた人々が多い。さらに遡れば西郷隆盛（一八二七〜一八七七）の西南戦争で薩軍に加担した者たちで構成されている。残念なことに、東洋学館は資金不足から一年余りで閉校になるが、平岡浩太郎は製靴店を上海に開き、継続して清国（中国）の事情を調査させていた。

東洋学館創立メンバーの中江兆民はフランス留学から帰朝後、仏学塾を開いていた。この時の門弟には原敬（一八五六〜一九二二）、宮崎民蔵（一八六五〜一九二八）がいる。一

般に、中江は「左翼の源流」と呼ばれるが、「右翼の源流」と呼ばれる玄洋社員の頭山満、平岡浩太郎との親交があり、左翼と右翼は対立するという構図は後付けであることが理解できる。

末広重恭は宇和島（愛媛県）出身の新聞記者だったが、東洋学館では館長を務めた。

さらに、樽井藤吉は奈良出身。「大東合邦論」を著したことで知られるが、柴五郎（一八六〇〜一九四五、陸軍大将）、曾根俊虎（一八四七〜一九一〇）との交流がある人だった。柴五郎といえば柴四朗の弟である。曾根俊虎は宮崎滔天の『三十三年の夢』に登場する海軍軍人である。

漢口楽善堂の綱領

漢口楽善堂に参画した高橋謙（一八六四〜一九二四年）は、漢口楽善堂の活動に対し、次のような決議を述べている。

一・清朝（清国、満洲族）は我国を敵視し協同禦侮の大義を解せざる者の如し。故に吾等同志は漢民族を助けて其革命運動を助成し、以て日提携の実現を期す。

一・東亜経緯（東洋の安寧）の実行準備として必要なる人材を養成育成する為め上海に学校を設立し有為なる人材を養成する。

一・長沙、重慶、北京等に支部を設け、革命派志士と連絡を保持し、革命運動を促進する。

一・将来露国（ロシア）の侵略戦に備うるた

め、同志を外蒙古に派して活躍せしむ。

上海で書籍と医薬品を商っていた岸田吟香は荒尾精を支援した。このことで、漢口や天津、北京に楽善堂の支店を出し、語学学習を兼ねての現地調査を行なうことができた。これが、日清貿易研究所、東亜同文書院の創立へとつながった。この日清貿易研究所の創立メンバーである荒尾精、漢口楽善堂のメンバーは「我が同士の目的は、世界人類のために第一着に支那（中国）を改造すること」と綱領に掲げた。

明治一九年に起きた「長崎事件」に代表されるように、日本の主権を侵害し蔑視する清国（満洲族）を倒し、漢民族の新しい政府を樹立すべきとも確認し合っている。この漢口楽善堂の綱領に合致したのが孫文だった。

昨今、窮地に立たされた孫文やビハリ・ポー（通称、中村屋のポー）を庇護したのは、玄洋社が組織拡大に利用したと述べる方がいる。しかし、支那（中国）の政治改革はアジア全体の植民地解放闘争に波紋を広げるとの考えからである。

そのための第一歩として、支那（中国）の政治改革を進め、ロシアの南下政策に歯止めをかける。さらには、欧米によるアジア侵略を食い止め、駆逐しなければならぬと行動した。

そういった、「身を殺して仁を成す」の精神を発揮した人々が漢口楽善堂のメンバー

だった。いわば、アジアの安寧のために身を挺した人々であったといえる。

右翼から国士へ

小野耕資

「右翼」「左翼」という幽霊

現代世界には幽霊が出るようである。しかも暗がりではなく、明るい場所を堂々と闊歩しているのだ。「右翼」、「左翼」という亡霊が。あらゆる政治勢力がこの亡霊を一日でも長く存続させようと躍起になっている。「敵」を作り出すことが自分たちを栄えさせるからだ。従って、自己利益のために亡霊退治に乗り出すことはない。冷戦崩壊は、「左翼」だけでなく「右翼」までも完膚なきまでに崩壊させた。断じて「資本主義の共産主義に対する勝利」ではない。混迷した現在の世界の政局が、それを如実に物語っている。

冷戦崩壊は、政治勢力にとってある種の危機であった。わかりやすい争点をなくしたために、政治家は言葉の貧困にあえいだ。イラク戦争を眺めれば、アメリカの「ネオコン」と呼ばれる人達は「イラクに自由、民主主義を輸出する」と言っていた。だが「自由」、「民主主義」という言葉はもともとフランス革命で革命派が圧政に対抗するために唱えた言葉ではないか。アメリカの「右

「翼」がそれを戦争の動機にしているのだ。錯乱というべきである。だが、現在に至ってみれば世界中がアメリカと同様に錯乱しているのである。

小泉政権以来のあの「改革」の合唱の果てに何が残ったかを知るが良い。わが国の「右派」は自由主義経済を進めるということになり、わが国の「左派」は人権だ、差別解消だと言っている。嗚呼いつの間にかアメリカの「右翼」「左翼」と同じではないか。自民党は共和党に、立憲民主党は米民主党に脱皮したのであった。アメリカ化は「改革」で完成した。「構造改革」とはすなわち「日本の構造をアメリカの構造に改革する」ことでしかなかった。「改革」の行き着く果ては「日本」の喪失でしかなかったことに、そろそろ気づかなくてはならない。

「右翼」は反共であり、共産主義の終焉とともに共産主義の役割を否定し、「男女平等」、「信仰の自由」、「移民」を否定し、「自由競争の経済」により一層移行しなければならぬと説く。なぜならば冷戦は共産主義に対する自由主義、民主主義の勝利であり、したがって共産的な政策は改めなければならないからだ。

一方「左翼」は「民主」の時代であるからより「寛容」で「平等」で「人権」の認められた世界の実現を主張する。「民主」とは一票の平等のことであり、したがって国家の構成員の平等を意味する、と説いている。だが

これらの議論はどちらも破綻している。もちろん「右翼」は男女や信仰の問題を差し置いて「自由」な競争だとは馬鹿げているし、「左翼」は平等や人権を保障するためには強い国家が必要だが、概して彼らは国家主義に反対だからである。

わが国の「右翼」と「左翼」の姿は、元来こうした「グローバル」なものではなかった。だが冷戦崩壊と一連の「構造改革」の合唱の果てに、新たにできた構造とは、日本の構造を破壊したただの世界の亜流であった。「格差を擁護する自民党」「右翼」、「格差に反対の立憲民主党」「左翼」という図式はいかにも「構造改革」がもたらした結果でしかなく、鼻白まされる思いである。両者とも伝統とか共同体としての在り方には興味がなく、ただ己の利益増進と利権保護にあくせく励んでいるにすぎない。

国土の源流と、国土がいなくなるまで

もともと「右翼」と呼ばれる人は右翼を名乗っていないかった。頭山満などは「国土」を標榜していたのであって決して「右翼」と最初から名乗っていたわけではない。それが大正時代ころより右翼左翼という名称に徐々に変わっていく。この間何があつたかといえばロシア革命である。共産主義化が進んだゆえに共産主義者が自己と違う思想の人間を「右翼」、「保守反動」と罵倒したのである。したがって右翼左翼保守革新などという二分法は

共産主義の消滅とともに闇に葬るべき概念である。保守思想だとか右翼思想などというのは本来存在しえないのである。

頭山満は高山彦九郎を豪傑とみなしていた（松本健一『雲に立つ』）。ここでいう豪傑とは、現代人が思い浮かべる豪快で強い人、という意味でもなければ、支那の原義のように才知あふれる人という意味でもない。たとえ志を果たし得ない場所にいたとしても、独り道を実践していく人のことだ。名利をもとめず、憑かれたように志の実現に邁進する「狂」の態度こそが豪傑の条件であった。この「狂」の感覚を松本は「原理主義」と呼ぶ。松本にとって「原理主義」とは、合理的で近代的な態度ではない、ある種の「狂」の感覚であった。右翼と左翼とはナショナリズムとコミュニティではない。ある時期まで、右翼と左翼は分かちがたく一体であった。豪傑か否か、「狂」の感覚を持ち合わせるか否かだけが問題であった。「共産主義を認めるか認めないか」という二分法が、「狂」の感覚を右翼と左翼に引裂いた。「狂」の感覚、「原理主義」は社会の底流にマグマのように流れる土着的エネルギーの爆発を呼び覚ます。「原理主義」は文明への反抗である。あまりにも文明化された今日、「原理主義」はあまりにも忘れ去られてしまった。しかし、同時に冷戦が終わりに引き裂かれた右翼と左翼が再び元の「狂」者に戻れば、あるいは近代思想からなる今日の墮落と利益社会のびこりを改めるきつか

けとなるかもしれない。

中江兆民はルソーの社会契約論を日本に紹介した人として知られるが、その思想は儒学をもとにした理想的道徳を現代にのみがえらせようというものであった。中江と頭山は交流があり、見解を同じくすることもあった。頭山を右翼の源流、中江を左翼の源流のように言われることもあるが、その「源流」は分かちがたいほどに共通している。松本健一が「玄洋社員で、頭山の黙認のもとに大隈重信に爆弾を投じた来島恒喜が、兆民の仏学塾の出身であることや、仏学塾の出身者で、兆民のもつとも可愛がった小山久之助が、内田良平の黒龍会の会員であることからわかるように、頭山満と中江兆民は決して右と左というふうな、対極に位置してはいなかった」（『思想としての右翼』）と言うように、もともとと国権と民権は遠いものではなかった。小林よしのりは、『大東亜論』で「後から付けられたレッテルで、彼は右、彼は左と、人を振り分け、「右と左が交流できるわけがないから、これは無思想だったのだ」と決めつけるような単純な分析は意味がない。中江兆民も頭山満も「民権」論者であり「国権」論者だ。ナショナリズムは両者とも強い。戦後、GHQや学者がルソーを日本に紹介したから中江は「左翼」としただけである」と述べている。右翼と左翼なんてものは後世の人間がいい加減に付けた区分であり、お互いの主張に通じ合うものがあればいくらでも連帯したのであ

る。

木下半治『日本国家主義運動史』によれば、内田良平の黒龍会は労働宿泊所を設けたり、「自由食堂」を作るなど社会事業も行ったという（慶應書房版十頁）。同書はこのほかにも、大川周明を会頭とする神武会が「一君万民の国風に基き私利を主として民福を従とする資本主義経済の搾取を排除し、全国民の生活を安定せしむべき皇国的経済組織の実現を期す」と謳っていることや、石川準十郎の大日本国家社会党が「我等は現行資本主義の無政府経済組織を以て現下の我が国家及び国民生活を危うする最大なるものと認め、公然の国民運動に依りこれが改廃を期す」と謳ったことなど、国家主義団体が資本主義による格差に対抗しようとしたことが多く記されている。それこそが戦前昭和の「国家改造」の内実であった。

河上肇は、島崎藤村にもつとよくヨーロッパを知ろうじやないかと話しかけられた時に、「愛国、心といふものを忘れないで居て下さい」と答えたという（牧野邦昭『戦時下の経済学者』）。河上は晩年、『自叙伝』で「私はマルクス主義者として立つてゐた当時でも、曾て日本国を忘れたり日本人を嫌つたりしたことはない。寧ろ日本人全体の幸福、日本国家の隆盛を念とすればこそ、私は一日も早くこの国をソヴェト組織に改善せんことを熱望したのである」と回想している。牧野が「河上にとって、ナショナリズムとマルク

ス主義は両立可能なものであり、最後までナショナリズムを捨てることはなかった」と評している通り、「ソヴェト組織」に変わったほうがよかつた否かは別にして、河上は日本の為に発言していた人物であった。

このように、「右翼」とか「左翼」と言った区分を思想家は簡単に乗り越えていく。だが、ソ連ができたころからこうした傾向は少しずつ少なくなつていき、戦後の米ソ対立時代からほぼ皆無になつてしまった。

右翼左翼保守革新などもうない

松尾匡は『新しい左翼入門』の中で右翼と左翼の定義について書いている。要約すると、右翼は世界をウチとソトに分け、ウチを擁護する思想であり、左翼は世界をウエとシタに分け、シタを擁護する思想だということ。その上で、「本当の右翼ならば、「ウチ」の内部では、共同体としての団結と助け合いを求める。したがって、その団結を乱す競争は制約しようとするし、共同体が「上」と「下」に分裂していくことを肯定したりはしない」という。まさにその通りだ。

しかし、例えば戦前の「右翼」と呼ばれた人たちは欧米のアジア侵略に義憤し、欧米に對抗することを訴えた。いわゆるアジア主義と言われる主張である。アジアをウチと考え、ソトである欧米に対抗する思想だ。また、日本の社会主義者と呼ばれる人たちは、少なくともその初期はあくまで日本国内のウエと

シタでシタを擁護する存在であった。シタの国民の生活が向上すると言って支那事変に積極的に賛成した人物もいた。原則は松尾氏の言うとおりだろうが、論者が何を念頭にしていたか、慎重に考える必要がある。

例えば若き日の葦津珍彦は「日本民族の世界政策私見」で日英同盟を「アングロサクソンの利益のために、印度民衆を抑圧せしむべき義務を承認した」と厳しく批判しつつ、併せて「民族の地位と歴史と現勢に鑑み、遠き将来をも慮り、天地の正道に立ち、根本国策を練り、上日本天皇の御裁可を仰ぎ、絶対不可侵の根本国策を確立」しなければならぬと説いていた。そのためには「内政の改革の断行」が必要であり、「外に、暴風雨の如き重圧を迎へ、内には資本主義のために激成せられし「階級の対立」を放任したならば、何を以てか民族の独立を保ち得るの途があらうか」と論じていた（『神道的日本民族論』）。



葦津珍彦

ここでの葦津はアジア主義的主張を出発点に反資本主義的主張に着地している。右翼と左翼の原理原則は松尾氏の通りなのだが、論

者の意図によつて簡単にかつ大胆に飛躍可能な分類であると言わなければならぬ。

冷戦が崩壊してから、もう長い。共産主義対民主主義と言つた二項対立はもはや通用しない。左翼の敗北と共に親米右翼が勝利を収めた形になっている。しかしそもそも民族主義において、「米国に甘く、支那朝鮮に厳しい民族主義」などありえるのだろうか。しかしこの少しゆがんだ民族主義が小泉・安倍時代の特徴である。世界の国々の国益を破壊しているのは米国なのに、それに対する義憤がない。むしろ米国についていくことが「現実的」だと思つている。確かに容易い道ではあるだろう。だがそれを唱えるネット右翼や親米保守は政治家でもなんでもないのだ。国際情勢を評論してみせてそのあと「日本は米国と共に特亜に立ち向かうべきである」と「現実的」に語られた日には、一体、「現実」とは何なのか、考え込まざるを得ない。彼らの思想的根幹が何えず、何か底が見えない恐ろしさのようなものを感じてしまう。靖国に祀られている英霊は半分以上が米国に殺されたのである。断じて「特亜」がしたことではない。彼らは一体、英霊に何を祈るのだろうか。「思想的根幹」を常に重んじる意見は少数派なのかもしれない。

このことはネット右翼に限ったことではない。もはや冷戦は体験的事象ではなく歴史的対象である。人は己が正しいと思うことを述べれば良いのであつて保守とか革新などはど

うでもいいことである。しかし右翼的、左翼

的と罵倒し合わなければ政治家も政治論壇誌も成り立たないと考えられている。だから未だに三芝芝居が国会でも論壇でも行われているのである。これでは論壇誌の低調も当然ではないだろうか。右翼左翼保守革新などもうない。むしろこれらを意識しつつ「右翼左翼どちらも極端で間違っている」などという日和見な態度も成立しえない。わたしは右翼でも保守でもなく、左翼でも革新でも無く、ましてや中道でもない。

右翼から国士へ

近頃世に「保守派」と見なされる論客の中には、冷戦的な右翼左翼保守革新の構造を乗り越える発言も見られる。例えば岩田温氏は『逆説の政治哲学』で、「同じ日本人が困難に陥っている。この現実を見つめず、結果として弱者の切り捨てを進めていくのではなく、日本人の同胞意識を根底に置いた弱者救済を目指すナショナリズムの形があるべき」であると、「貧困にあえぐ同胞」に手を差し伸べることを考えることもまた、「ナショナリズムの一つの形」として、氏は自身のメールマガジンで、「以前、『逆説の政治哲学』を執筆した際に、保守派が貧困問題に取り組むべきだと書いたら、「お前は左翼か？」と非難されたことがあった。事ほど左様に、保守派は貧困問題に無関心なのだ」と論じているが、確かにまだまだこういった考えは少数

派なのかもしれない。

古谷経衡氏は『若者は本当に右傾化しているのか』で、「同胞融和」の観点を「国民国家を形成する愛国心の重要な根幹の一つ」とあるとし、「反貧困」を「愛国心」を重んじる立場から評価した。その上で、「保守派は愛国心の有無（あるいはその濃淡）を踏み絵に用いておきながら、実際にはその愛国心の具体的発露の結果である反貧困と言うテーゼを愛国心の範疇には入れていない」ことを「倒錯」であると批判した。

憂国者とはこの国をより良くしようと思う人のことであり、「国士」とはそれを歴史と伝統に根付いた形で行おうとする人のことだ。守るべきものは何か。それを真剣に考えることから明日が生まれるのではないだろうか。政策は守るべきもののためにしか生まれない。「国士」というと、大時代的で豪放磊落な印象を受ける。わたし自身も自らを国士というにはあまりに軟弱でためらいを覚える。ゆえに「国粋主義者」などと言ってきたわけである。

国粋主義が信じる対象とは「国民国家としての大義（国家主権）」、「自民族の歴史、文化」の二つ、つまり広義の「国家」である。政府ではない。国粋主義の思想の源泉は何か。それはご皇室と靖国神社である。国のため命を捧げた英霊に対し敬意を表し、自分も国のために尽くす、尽忠報国の決意を固めるのである。何に忠かといえは、ご皇室であり、国

家である。皇室に忠であるとは、今上陛下の個人崇拜をするということではない。天皇が国を治めるこの国の原点に忠実でありたいということである。国家に忠であるとは政府に盲従するということではない。歴史と伝統、民族文化が織りなすわが国の美質とそれに殉じた先人への敬意を失わないということである。

しかし一方で戦争を経験もせずに「国のために」と叫んでも空疎である。実際戦争になったら、「死にたくない」という気持ちで苦しむだろう。そのほうが人間として自然な姿である。だが「実際どうか」という姿と「理想はこうだ」という姿は矛盾していて構わないではないか。それが理想の姿だという姿勢が大事なのである。英霊だつてこうした苦悩なしにいたわけがない。その恐怖を克服して、国に尽くしたからこそ英霊は偉大であり、顕彰されるべきなのではないだろうか。自らを国士と呼ぶには未熟に過ぎるが、まさに国士と呼ばれるべき人物へのあこがれは胸に抱いているつもりである。おそらく国士は周囲を威圧する類の人物ではない。平常心を保ち、おごらず、後輩や目下の者にも丁寧で、それでいて義憤するときは憚ることがない。そういう人物である。

右翼から国士へ。反共から正統の追求へ。目指すべき道は眼前に広がっている。

『アジアの夜明け—インド独立の英雄たちと日本』②
原作・草開省三／要約・原嘉陽

五

ラホール事件の六ヶ月後、グプタは日本に向かう石炭運搬船常盤丸の乗組員にまぎれこみ、長崎に着いた。さっそく同志ジャストリヤの家を訪ねると、ポース先に到着していた。二人は抱き合つて再会を喜んだ。

「あれ以来、君の行方が全くわからなかった。どうしていたんだ」

「山を越え、ビルマに出て、そこから船に乗ったんだ。だいぶ苦労したよ」

「幸い、我々が日本に来ていることはまだ、イギリス当局に気付かれていないようだ。だが、注意したほうがいい」

「日本とイギリスは今、同盟してドイツと戦っているそうだね」

「しかし最近、日本ではイギリスのドイツ支配の実績が知られるようになって、我々の理解者が増えているようだ。その人たちと、連帯を図ろう。それから、中国では、中華民国が成立して、孫文が臨時総統になったが、世凱との戦いに敗れ、今日本に亡命していると聞いた。孫文とも、ぜひ会ってみよう」

二人は、東京赤坂・雲南坂の、孫文の仮寓に出かけた。

孫文さん、あなた方も長い間、大変な苦労

を重ねていますね」

「そうです。しかし第一の関門は突破しました。これからは国内の分裂をなくし、中国四億の民衆のためになる政策を実施して国力を充実し、黄色人種の屈辱を晴らすのです」

「我々は今、とにかくイギリスの圧政に抵抗するということだけを考え、それから先のことには頭が回りません」

「中国やインドだけではない。フィリピン、インドシナ、インドネシアなど、みな同じ状況です。十数年前、アメリカがフィリピンを乗っ取ったとき、これに抵抗してアギナルドが独立運動を起しました。日本の犬養毅さんや私が援助をしました。それは失敗しましたが、アギナルドは感謝し、私に多額の資金をくれました。それが大役に立った。アジアの人々が協力し合うことが大切です。日本、中国、インドが協力すれば、アジアの解放は実現します」

「なるほど。上海などにも、インド人の仲間がいます。日本、インド、中国の友好を図る協会を、ぜひ設立しましょう」



孫文

同じ頃、グプタは東京大学の赤門付近で、ある青年に声をかけた。

「あなたは大川さんですか」

「そうです。あなたがグプタさんですね」

二人は並んで歩き始めた。

「ジャストリさんから、あなたがインドの問題に関心と理解を持っていると聞いて面会を希望しました」

「私も、インド独立運動に挺身している人が来たと聞いて、ぜひ会いたいと思いました」

大川周明はグプタをコーヒー店に案内し、二人そこで話し合った。

「あなたはタゴールに助けられた、と言いましたがインドに行つてタゴールと会い、親しくなった思想家、岡倉天心を知っているでしょう。僕は彼が死ぬ直前に、東京大学でした講義を聞いているのです。彼はインドや中国をその目で見て、『アジアは一つだ』と、直感したのです。僕は学生時代、宗教に関心を持って、キリスト教、インド哲学などを学びましたが、最近では日本の歴史を学び直しています」

「そうですか。…実は今、我々の指導者、ラジパト・ライも日本に来ています。この機会に在日インド人や日本人々に我々の運動をもっと理解してもらおう、催しを開きたいのです。協力してくれませんか」

「できる限りのことは、しますよ」

「イギリス大使館を刺激しないためには、どんな会合にしたらいいでしょう。」

大川は少し考えて、言った。

「大正天皇御即位の、祝賀会にすればいい」

「そうしましょう」

大正四年、十一月二十七日、上野精養軒で、在日インド人会主催の、大正天皇即位御大典祝賀会が開かれた。会は盛会であった。大川も、

「…先頃、かのタゴール氏が、アジア人で初めてノーベル文学賞を受賞せられたことは、インドの気高い精神的伝統が今なお息づき、むしろ今日の混迷せる世界に光明を点じつつある好例であります……」

と雄弁を振るつた。



ボースとその支援者、後列左が大川

グプタやボースもさりげなく出席していたが、時折彼らの方に視線をやり、ささやきあう男たちがいた。彼らは会が終わると、その足でイギリス大使館へ入っていった。

六

それからまもなく、グプタとボースに、警察から出頭命令が来た。

警察署に出頭すると、

「イギリス大使館から申し入れがあった。お前たちは敵国ドイツと通牒し、インドでの反乱を企てているから、国外退去を要求することだ。日本政府はこれを認めた。今から五日以内に、日本から退去せよ」

と通告された。

二人は、船の便の予定を調べに行った。

「五日の間に、アメリカ行きは、一つもない。やはり彼らは、それを承知で、五日という条件をつきつけたんだ。西に行く船に乗れば、上海か香港で捕まるのは間違いない。船に乗ったら、もうおしまいだ」

「こうなったら、日本の有力者に助けを求められないか」

このことは新聞にも大きく取り上げられ。世論はボースやグプタに同情したが、政府の態度は変わらなかった。犬養毅は、石井菊次郎外相と話し合った。

「今回の処置は、亡命者に対する国際的慣行にも反する、非人道的なものだ。命令を撤回してください」

「何をいうんだ、犬養さん。彼らは単なる亡命者ではない。敵国ドイツのスパイの疑いがある。今、わが国はイギリスと同盟して、ドイツと戦争状態にある。敵を利するようなどとは断じてできない」

中村は頭山の家に向かった。頭山邸に着くと、すでに五、六人の有志が集まっていた。「頭山さん、今来る途中で、中村屋の主人と話したんだが、良い隠れ場所があるそうです。そこを提供してもいいと、言っています」「そうか」

「彼らはドイツとはつながりがないと、私は信じる」

すると、杉山茂丸が言った。「隠れる場所が見つかったのなら、後は私にまかせてくれ」

「今ここで、それを証明してくれますか」

その日の夕刻、頭山の使いの者が、グプタとボースを迎えに来た。頭山邸に向かうと、数人の刑事が、あからさまにあとをつけてきた。二人が邸内に入ると、門の周りを固め、見張り続けた。

「……」

家のなかでは、中村彌や相馬愛蔵が待ち構えていた。相馬が言った。「これから、隠れ家に案内します。その前に、着物に着替えてください」

犬養は、頭山に電話した。

着替えがすむと、一行は家の裏手から脱出した。裏道をしばらく進むと、そこに一台の自動車が出ていた。車は三人を乗せて走り出した。

「私ばかりでなく、各方面から大隅内閣に働きかけているが、ちががあかない。頭山君、何か良い策はないもんなか」

刑事たちは、待てども待てども二人が出てこないで、いらだててきた。しかし門は堅く閉ざされ、たたいても反応はない。

「その話は、わしも聞いた。大隈重信は、相変わらず、わからずやだな。どうやら、わたしの出番のようだ」

「よし、まず邸内に電話を入れてみる」

十二月一日、退去の期限の前日の朝、東京・新宿にあるパン屋、中村屋に男が、パンを買いに入った。店内には主人、相場愛蔵がいた。「いらっしやいませ」

「二人はもう、帰ったぞ」

ボース、グプタ、相馬を乗せた車は、中村屋に到着していた。

七

二人が、中村屋の二階の一室に隠れひそむ生活が始まった。相馬愛蔵、黒光夫妻は、できるかぎりの世話をおしまなかつた。「どうですか。狭い所で窮屈でしょうが、我慢してください」

「有難うございます。一つ、お願いがあります。この機会に、日本語を勉強したい。わかりやすい、テキストが欲しいのです」

「それはいいことですね。すぐに何か持つてきましょう」

数日後、愛蔵はテキストを二揃い持ち、娘の俊子を連れて、部屋に入ってきた。

「お待ちせしました。どうぞ、これを使って勉強してください。それから、私の娘の俊子です。あなたたちのことは、よく説明しました。食事を運ぶ手伝いをさせます。それと、日本語を話す、練習相手になるでしょう」

「はじめまして」

「はじめまして。俊子さんですね。私はボースです」

「わたしがグプタです」

二人が部屋を出ると、ボースはグプタにささやいた。

「おい、見たか。かわいいお嬢さんだな」

俊子と話をするのが、彼らの唯一の楽しみとなつた。

「俊子さん、あなたの着物の、そのベルト、それは何といひますか」

「これは、帯といひます」

「とても、きつそうですね。苦しくありませんか」

「すこしね。でも慣れば大丈夫です」

「私も、着物に慣れました。日本の着物は、冬は暖かくて、いいんです。インドでは女性はサリーという、ゆつたりした服を着ます」

「インドは暑い所なんですよ」

「そうですね」

「そういえば、この頃、少し暖かくなつてきた」

「もう梅の花が咲いています。ひと月もすれば、桜が咲くでしょう。早く、外を歩けるようになるといいですね」

三カ月が過ぎ、グプタは色々と思いをめぐらし始めた。

「ボース、いつまでもこの家に世話になるのも心苦しい。それにインドの状況も気掛かりだ。私はアメリカに行こうかと思つた」

「しかし下手に動けば、かえつて迷惑をかける危険がある。もう少し、様子を見たほうがいい」

ある夜、皆が寝静まるのを待つて、グプタは中村屋を抜け出し、歩き続けて大川の下宿を訪ねた。

「大川さん！」

「おお！グプタじゃないか」

「私は、アメリカに渡りたい」

「そうか。まあ、しばらくは、ここに居ればいい」

寝起きを共にし、二人は同志的なきずなを

強めた。食事をしながら、グプタは言った。

「大川さん、失礼だけどあなたはあまり、料理が上手ではない。私がカレー料理を作つてあげます。材料を買つてきてください」

大川は苦笑した。材料を買つて渡すと、グプタは張り切って料理を作つた。その味は、なかなかのものだった。

「これはうまい！グプタ君、ぜひ作り方を教えてくれ」

グプタはアメリカへ渡つたが、半年後、日本政府の方針が変わり、亡命者を保護するようになったと知り、また日本にもどり、頭山に会いに行った。

「そうか。アメリカへ行き、また日本にもどつたというわけか」

「名前をバブ・ボビーと変えました」

「確かに日本の警察の追求はなくなったが、イギリスは探偵を雇つて一層厳しく追跡している。もし見つかれば拉致されるだろう。しばらくは地方を旅してはどうだ。日本を知る機会にもなる。護衛をつけてあげよう」

頭山や内田良平の援助により、グプタは二人の護衛の案内で、伊勢、四国、九州と、各地に逗留しながら長旅を続けた。

四国では、巡礼の一行がグプタを見ると、手を合わせながら口々に言った。

「あなたはお釈迦さまの国の方ですね」

「お偉い方に違いない」

「ぜひ、ここに一筆、お書きください」

グプタはあわてて、言った。

「いえいえ、私はインド人ではありません」

鹿児島を旅すると、先々で

「西郷どんに似ている」と評判になった。

宿屋に滞在していると、近所の人々が

「芋をふかしたので食べてつかわさい」

「鶏が卵を生んだので・・・」

と訪れてくるので長居もできず、また旅立つた。

一方、ボースはその後ずっと東京にとどまっていたが、追及の手は厳しく、住所を転々としていた。俊子が連絡役として活躍した。

「ボースさん、いらっしやる」

「やあ、俊子さん」

「これは父さんからの差し入れ」

「それから、またそろそろ転居の準備をしてくださいって」

「またですか。私はかまわないけど、皆さんに迷惑をかけ続けて、申し訳がない」

「いいんですよ。あなたがたは、立派なことをなさっているんですから」

頭山は旅から帰つたグプタと、ボースを呼び寄せた。

「そうそうイギリスとドイツの戦争も終わるだろう。そうすれば、日本にいる限り命の危険はなくなる。逆に一步でも外地に出れば命が危ない。少し日本に腰を落ち着けて、仕事をしながら活動をしたら良い。そのつもりなら、嫁さんを世話しよう。グプタ、いやボビー君には見合いの相手をさがしている。ボース君、君は俊子さんのことはどう思うかね」

二人は顔を見合わせた。

大正七年七月、ボースは俊子とひそかに結婚式を挙げた。親しい人々が集まつて、二人を祝福した。



ボースと俊子

同じ頃、グプタは小林嬢と親しくなっていた。

「あなたは私はどんなことをしているか、聞いていますか」

「はい、色々とうかがいました」

「私は明日の命さえわからない、身の上なので」

「でも、人間って多かれ少なかれ、似たようなものじゃありませんか。明日のことは、誰もわかりません」

「私は今まで、世界中を転々としてずいぶんつらい目に会いました。でも、日本の人はとても親切にしてくれました。私は日本を好きになりました」

「私は外国のことは知りません。でも、この頃は日本でも、外国への関心が高くなりました。『カチューシャの唄』って、知ってますか。とっても流行つたんですよ。カチューシャは、

ロシアの女性の名前です」

「どんな歌ですか」

「カチューシャ可愛いや 別れのつらさ 今宵ひと夜に ふる雪の 明日は野山の ララ道かくせ・・・」

「カチューシャ可愛いや 別れのつらさ・・・」
小林嬢と結婚したグプタは、横浜に貿易会社を設立し、商売に励むと共に、独立運動やそのための勉強もおこなわなかった。子供も生まれ、しばらくは平穏な生活が続いた。

その間、大川たちとともに「人種差別撤廃、アジア解放」をスローガンに、全国各地で講演会を開いてまわつた。グプタは自らの体験を語り、アジア人同士の友好と団結を訴えた。

「日本は幸い、他国の植民地になることをまぬがれ、その苦しみを知らないでいます。しかし、アジアのほとんど地域では、白人の政治的、経済的支配とともに、あからさまな人種差別がまかり通っているのです！また、アジア人同士が、お互いに偏見を持つて差別し合っている場合もあります。まず、これをなくさねばなりません・・・」

グプタの妻は、二人目の子供を産んだころから、肺病にかかり、次第に咳き込むようになった。グプタは心配して、入院させたが、病状は重くなるばかりだった。グプタは、病室を訪ねて、言った。

「病気はたいぶ重いようだ。一人で実家へ帰つて、ゆっくり静養したほうがいい」
「でも、子供たちは・・・」

「それはなんとかする。心配はいらない」
「…」

八

大正十二年九月一日、午前十時すぎ、グプタは湯島天神近くの自宅を出て、横浜の店に行きために、東京駅へむかった。その途中で、知人ばったり会った。

「今日は土曜日ですよ。そんなに急がなくてもいいでしょう。ちよつとお茶でも飲みませんか」

断りきれず、レストランでお茶を飲み、昼近くなったので、食事を食べようとしていると、突然大きな揺れが襲った。関東大震災が起きたのである。数日後、横浜の店に行つて、見ると店は完全に倒壊していた。

一方、ビハリ・ボースはその頃、日本に帰化した。俊子との間には子供も生まれ、渋谷の隠田にある家で暮らしていた。グプタはボースを訪ねた。

「元氣か。横浜の会社はどうだ」

「なんとか、再建するよ。ボースさんは日本に帰化したそうだな」

「妻や子供のことを考えて、決めた。君もそうしたらどうだ」

「私はまた、インドに帰つて運動することを夢見ているんだ。その前にも、必要なら、世界のどこにでも行く」

「しかし君にも子供がいる。それに、再婚しただろう」

ボースは、近くに俊子がいなかったのを確かめて、小声で言った。
「実は、俊子も体の具合が良くない。心配しているんだ」

「大丈夫だよ、きつと。ところで、孫文先生が日本に立ち寄り、神戸で講演をするらしい」「今や中華民国の、最高指導者だ。しかし各地の軍閥や、反日本運動に悩まされている。このままでは、日本と中国がまた、戦う恐れもある」

「それを日本人にうつたえるのだろう。ボース、私は今タゴールさんを日本に迎える準備で忙しい。あなたが孫文先生に会つて、激励してください」

大正十三年十一月二十八日に神戸高等女学校行動で行われた、孫文の講習会は二千人の聴衆を集めた。孫文は「大アジア主義」の題名で、熱弁をふるつた。

「…ヨーロッパの「最近百年は、どのような文化だったでしょうか。それは科学の文化であり、功利を重視する文化でした。そこにはただ、飛行機と爆弾、鉄砲と大砲があるだけであり、武力をもちいて人を圧迫する文化にすぎない。これは中国の言葉では「霸道」の文化と言えます。しかし、わが東洋は、これよりずっとすぐれた「王道」の文化を持っています。この文化の本質は、仁義・道徳でもありません。これは人を感化するのであって、人を圧迫するものではありません。我々が大アジア主義を語るのには、王道を基礎とし、不正

排撃の叫びをあげるためであります。…」
講習を終えて帰ろうとする孫文に、ボースが走り寄つた。



孫文先生の演説の様子

を説いてください。これからは、あなたがたに期待します」

俊子の病状は、次第に悪化していった。ボースは俊子に付き添つて、看病し続けた。

「俊子、具合はどうだ」

「苦しくはないか」

「私にはかまわないで、お仕事に出てください。私や子供のことには、母が世話してくれるでしょう」

「俊子！」

俊子は、大正十四年、二十八歳の若さで、肺炎のために死去した。ボースの悲しみは深かった。

(続く)

樽井藤吉と明治維新発祥記念碑

仲原和孝

この度、当会顧問の坪内隆彦氏より、「樽井藤吉についての記事を書いて欲しい」というお話を頂き、樽井藤吉について書かせて頂く。樽井といえば、明治明治二十六年に「大東合邦論」を出版し、「日韓は互いの国号を残したうえで『大東国』として合邦し、欧米の侵略に対抗しよう」と主張し、所謂アジア主義の源流として知られている。しかし、樽井が晩年、「明治維新発祥記念碑」建立に情熱を注いだことはあまり知られていない。

「明治維新発祥記念碑」建立計画は、大正六年に樽井を始めとする地元有志によつて発起された。筆者の手元には「明治維新発祥地記念銅標建立主意書草案」がある。(五條市史に収録されている)その内容を要約すると、大和の国は我が国の始まりの地である。その地に於いて決起した中山忠光公を始めとする天忠組は、明治維新の殊勲者であり、大和の五條は維新の発祥地である。しかし、今や世間では忘れられつつある。中山公らの忠魂を顕彰すべく、天忠組決起の地である五條の櫻井寺に銅標を建立しよう・・・という内容である。そして末尾に、日本全国より寄付を募り、銅標を建立しようと呼びかけている。ちなみに、この主意書が樽井の起草であるかは定かではない。

しかしこの計画は頓挫する。理由は簡単、

資金が集まらなかったからだ。この時の樽井は、ひどく落胆したと思う。しかし、記念碑建立への情熱は失つておらず、二年後の大正八年に「明治維新発祥記」を出版する。しかしその三年後の大正十一年、樽井藤吉は記念碑の建立を見ることなくこの世を去った。

しかし、これで明治維新発祥記念碑建立が頓挫したわけではなかった。「不二」昭和五十七年五月号に掲載されている「東亜先覚者列伝 樽井藤吉とアジア維新」は、「後に同碑（明治維新発祥記念碑のこと）は村人の手により天忠組の決起の地、桜井寺に建立された」と結んでいる。実際、樽井の死後十四

年後の昭和十一年に「明治維新発祥記念碑建設会」が設立されている。会長には時の奈良県知事が就任し、賛助員には頭山満、内田良平、近衛文麿、廣田弘毅、平沼騏一郎、松岡洋右ら錚々たる面々が名を連ねている。さらに驚くべきは、建設会の規定に「本会の事業資金は金百万円とし」と定められていることである。当時の一円の価値が千円から三千元であるから、現在の価値に直すと一億円以上である。前述の樽井らの計画とは比べ物にならないくらい大掛かりな計画だったことが伺える。

そこで、筆者は桜井寺に建立されたときのある自宅から燃費の悪い中古のワゴンRで五條・桜井寺へ向った。ところが、桜井寺には「天忠組本陣」の碑はあったものの、「明治維

新発祥記念碑」と思われる碑は存在せず、お寺の方に訪ねても「知らない」という答えだった。そこで近くにある五條市立図書館で、先述の「五條市史」や天忠組関連の資料を探したところ、地元民が作成した天忠組関係の写真集に「明治維新発祥の地」と書かれた石碑の写真を発見した。（地元民手作りの為、貸し出し不可）

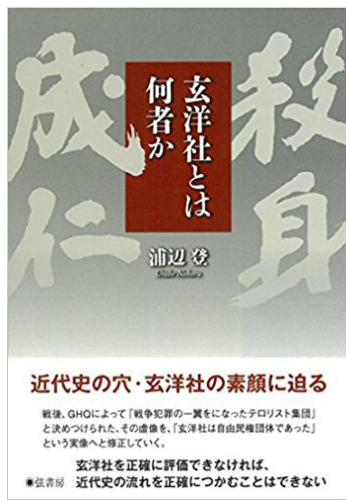
ネットで調べたところ、民俗資料館（旧・五條代官所長屋門）の入り口にその石碑があることを知り早速向った。しかし、その石碑には「明治百年記念事業として旧代官所跡（歴史公園）に建之」と書かれており、昭和四十年代に建立されたものと考えられる。その「明治百年記念事業」として、元々桜井寺に建立されていた石碑を移設し、新たに作り変えられた可能性も考えられるが、それに触れるような記述は一切無い。やはり「明治百年記念事業」の一環として建立されたと考えべきであろう。

結局、樽井が晩年情熱を注ぎ、その思いを受け継いだ地元民が建立した「明治維新発祥記念碑」の存在を確認することはできなかった。そもそも同碑は本当に建立されたのかも謎のままである。しかし、当初は樽井ら地元有志による計画だったが、樽井の死後には時の総理までもが賛同者に名を連ねる大掛かりなプロジェクトとなっていたことを考えると、やはり建立されたとも思える。建立はされたものの戦火により消失したか、はたまた

この計画もあらゆる事情により頓挫したのか、様々な説が浮かぶが、肝心な同碑が桜井寺に無く、五條市史にも「建立された」とは書いていない。

いずれにせよ、樽井藤吉と明治維新発祥記念碑については、もう少し詳細な調査が必要であると痛感した。

評書 浦辺登著 『玄洋社とは何者か』



あったことは、意外に思う人も多いかもしれない。だが、「右翼」「左翼」などという冷戦観念で歴史を眺めること自体が、誤っていると言わなければならない。

もう一つ現代の日本人は歴史を大いに錯覚していることがある。それは玄洋社を何かおどろおどろしい大陸侵略を陰に陽に企んだ右翼団体であるかのように思うことだ。玄洋社とは、福岡を中心とした地域の互助組織であり、社員や社友には様々な人物が在籍していた。後に満鉄を中心に活動する相生由太郎や、麻生太郎副総理の曾祖父で九州の炭鉱王麻生太吉も社友であった。社友の照会では、他にも金子堅太郎や團琢磨など意外な名前も見ることが出来る。

このように玄洋社は非常に多様な性格を持った組織であったのである。本書は、こうした玄洋社の歴史を、明治から敗戦後GHQに解散されるまで追ったうえで、更に玄洋社解散後の関連人物のその後まで紹介している。玄洋社及びそれにかかわった人々は、自由民権運動、日清・日露戦争、辛亥革命、昭和維新運動、満鉄、東京オリンピックといった日本の近代史の重要な局面で、それぞれ重要な役割を演じていた。玄洋社を理解することとは、日本近代史を理解することなのだ。

（文・小野耕資）

「イトウ（伊藤博文）、ヤマガタ（山縣有朋）、ダメ。アトをタノム」。中江兆民が最後の力を振り絞って石板に書いた遺言である。では、中江兆民から「アト」を託された人とは誰であったのか。それこそ、玄洋社の中心人物、頭山満である。

中江兆民はどちらかといえば左翼的イメージで語られることが多い。その中江と「右翼の親玉」と言われることもある頭山が昵懇で

史料・「中野正剛氏との 最期の会見の思出（昭和 二十年十月一日記）」

寺島三郎

弊会顧問の原嘉陽氏から、以下のような補記と共に、故寺島三郎氏の遺稿をお寄せ頂いた。以下に全文を掲載する。

〔補記〕

本稿は私（原）の大伯父にあたる寺島三郎の遺稿で、最近、親戚の半田昌規氏より託された。

筆者は一冊の歴史探究書を著した以外に、特に文筆的な業績はないようだ。しかしこの遺稿は「昭和十八年の中野正剛」を想い起こす、参考資料の価値ありと感じ、掲載をお願い申し上げた次第である。（中野氏の思想、政治活動については、軽々しく批評できないと思う。近代欧米諸国の好戦的な世界戦略や、特に昭和初期の、複雑怪奇な世界情勢などを考え合わせねばならない。）

なお、漢字や送り仮名、仮名遣いは、ほぼ原稿通りとし、判読困難な字句は推定によった。「」のつけ方などは適宜修正した。文責は原にあります。

（以下本文）

中野さんに関しては、拙著「幕末維新維

話」中に折にふれ、機に応じて様々な事柄を書いて置いたが、僕はこの著が製本された十八年十月一日、直ちに一冊を氏の御邸に郵送した。超へて十月二十六日の深夜、同氏が割腹自殺を遂げられてから、葬儀当日に、かつて人力車をいて大正六、七年以来長い間氏を乗せて走り、それから昭和二、三年頃からは自動車運転の免許を得て、同氏の死の直前まで運転をしてゐた、平武為次君に会ったので早速、同人に向つて尋ねた。

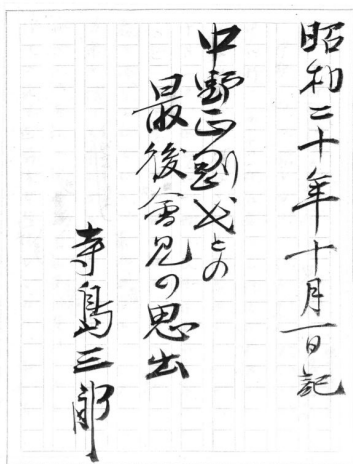
「オイ、武為次君、僕は去る一日に僕の「幕末維新雑話」一部を中野先生に郵送して置いたのだが、先生は僕の本を読まれたであらうか？」

と、こう聞くと同人は直ぐ、こう答へた。「エエ、先生は自動車の中でも又家でもたしかにお読みになされました。そして先生は私に対し、こんなことを言はれましたよ。」『寺島君の本を読んだら、僕の事が随分書いてあったよ。丸で僕のことばかり書いたよ。うなものだったよ』と言はれて大変御機嫌が良かったですヨ。」

自分はこの忠実な運転手の言葉を聴いてホントウに胸がこみあげて来るほど嬉れしくなり、「アア、よかった。あの本の中には永い間中野さんにも云はず只自分の心の中に秘めて置いた、私の中野観を殆んど全編の中に織り込んでおいたのだ。」それを生前の中野さんに読んで頂いたことが計らずもこの運転手の口から漏らされて始めて知つ

た時の何とも云へぬ感激、僕の眼は涙で一杯となつてしまつた。

僕が過去五十余年間、中野正剛を尊崇敬慕して渝らぬ友情と至誠とを尽くして来たことは、今からふり返つて考へても少しの偽りも又不純もなかつた。もちろんこの永い間には妻々氏から叱られたことも、不機嫌な態度に接したこともあり、稀れには半年も氏の家へ足踏みを絶つたことなどあつたが、互いに深く信じ合つてゐたことには微塵も揺るぎがなかつた。



想へば、大正四年十月、僕が滞米中、米国オーランド市で同氏の演説を始めて聴いて、主催有志者の十名ほどと共に氏を囲んで支那料理を会食し、更に同年波止場まで御見送りして、それから二度ほどの文通が結縁となつて、自分が帰朝した、大正六年八月から、五十年もの永い間、非常に深い関係を続けた。同氏と僕との間柄は、考へれば浅からぬ宿縁であつたことを思ふ。

敗戦日本の今日の現状と今は亡き中野さんのことなどを思い合せると万感胸を衝いて云ふ処を知らぬと云ふ有様である。

自分は今、永い東京の生活を打ち静養中だが、「余の観たる中野正剛」を執筆しやうと考へてゐる。

東條の憲兵政治の大断圧で、あの時割腹自刃された時には、さぞかし残念とも、無念とも思はれたことであらうが、いまとなつてみると、却りて良い時に自決されたものだと思はれるのである。

ここには将来の参考資料として、僕が中野氏と最後に会見たときの思出話を二つだけ記して置こうと思ふ。

二回の会見の中、最初は、昭和十八年五月中ばのことだ。中野氏の伯父八十翁石田寅太郎氏は中野邸の隣家に住んで居り、ここを訪ねて同氏と同道して、中野さんと三人で会つた時のことである。

石田老と僕の二人が中野邸の応接で腰をかけてゐる処へ、中野さんがコト／＼と義足の音を立てて這入つて来た。そして開口早々時局の甚だ悲観すべきを語たり、東條一派の独善と無知無策、官僚統制の百弊などを痛罵し、もし、このままの推移に任せなば、残念乍ら日本は負けだヨ、とあの痛憤の状は身も心も破ぶれむばかりに見へた。

僕はこの時次ぎのやうなことを氏に申し

た。

「私は、あなたに率直に申し上げますが、私
はここ二十数年間幕末の歴史のみを研究し
て来ましたが、それらの事をだんぐ」と調
べてみると、いつの時代でも、真に世を憂
い国の前途を誤らしめぬ為めに説く、先覚者
の意見卓説と云ふものは、総じて俗物的儉
安者たる政治家達に容れられた例しはあ
りませんでした。例とへどんなに立派な正
しい主張でも、彼等の悦ばぬ政策や意見は
決して受け容れられないと云ふのが通則で
す。」

とてそれから幕末国難期の、嘉永六年ペ
ルリ来航時に於ける佐久間象山の閣老への
上書や、文化時代の平山行蔵対幕府の關係
などを詳さにお話して、「どうか、あなたは、
こんな現代の俗物政治家どもを相手にする
を止めて、知己を百年、千年に待つと云ふ
お考へにならねえ。それで今のやうに焦
らず、急がず、飽く迄真直ぐにあなたの信
条を確く執つて進んで下さい」と、こう私
は直言した。

すると、中野さんは、急に両手を広げて、
「オイ寺島君。一寸待つて呉れ。俺れは、
そんな百年、千年に知己を待つと云ふやう
なことをしてゐるのじゃない。俺れは現在
眼の前の生きた仕事をしてゐるんだ。そん
な悠長なことでは駄目なんだよ」と。」

僕はその時直ちに言葉を次いで、
「イヤそれは良く判つてゐます。然し過去の

歴史を考へてみても、一世の先覚者と云ふ
ものは常に世人よりは百歩千歩の先きを見
透して、之れに対処する計画を実行しよう
とするのに、実際の政治担当者である俗物
どもは、全く現状維持的で、すべてを、イー
ギーゴイングで行こうとするから、とて
もあなたの言説を容れるやうな雅量などは、
薬ほどもありません。ですからそんな狭量
な独善者達を相手に如何に高邁な言説を費
やしても結局は無駄な努力です。だからそ
んな連中を眼中に置かず常に大所高所か
ら全日本の人々を正しく導くと云ふ方面に
力を注いで下さい。」と熱烈血を吐く思い
を込めてこう申した。

すると、中野さんは、「イヤよく判つた。そ
れでは、俺れは今まで通りの言説を続けて
行つて差し支へないのだネ。」と。

僕は言下に、「そうです。それで結構です。
どうぞ充分自重して下さい。どうかあな
たは、今日まで通り傍観も振らずに、あな
たの永い間操守してきた信条を守つて直往
邁進して下さい。勿論東條の無軌道ぶり
には私達素人でさへ眼に余るものがありま
す。然し今あなたが彼等に対して真向ふか
ら反対したのでは実際に危険です。」と忠言
を呈した。

僕は永年中野氏の恩顧を受けて非常に親
しい關係ではあるが、いままで政治問題
などでは、余り氏と議論なぞしたことがな
かった。それは、政治家の中野さんと、政

治家ではない僕とでは、余りに段違いであ
るので、つい気遅れがして思ふことも充分
には申し述べること出来なかつたと云ふ
理由も多分にあつたのだ。

然るにこの頃の僕は一度び歴史上の事と
なると、自ら信ずることも深くなり、たと
へ中野さんの前であらうと又外の人の前で
も充分に自分の意見が思ふやうに自然に話
しが出来るやうになつたのは自分乍ら不
思議な位である。

斯くして、僕と中野さんとは互いに真剣
な眼を見合せて語りあつた。

やがて、中野さんは、心から満足げに、
「よろしい。僕は君の言の通りに行こう」
と快然として申された。

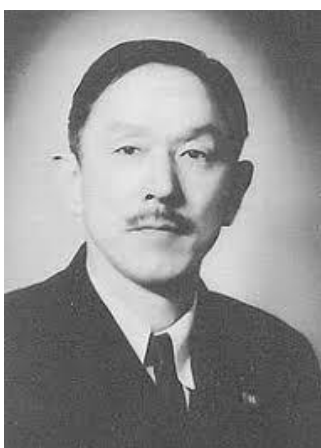
以上はこの日の両者の対談の内容である
が、傍らで黙つて二人の話を聴いて居られ
た、

石田老台は、あとで僕に向かつて、
「寺島さん、あなたは仲々良く歴史を調べて
お出ですネ。象山の献策論の内容や、平山
のロシヤ禍に備へんとするあの熱情には私
も大いに教へられるものがありました。中
野に対して、あなたが、それだけの意見が
吐けたことは、実は失礼ながら私は意外に
思いましたよ。」と大変に賞められたが、

石田老台からこう云はれて、自分もホン
トウにその通りだと思つた。後ちになつて
考へてみると、永年あれほど親たしくして
ゐた、中野さんに対して、あのやうに率直

に思ふ存分意見を述べられたと云ふことは、
結局歴史に対する僕の自信が思はず知らず
に迸ばしつたものだと気付いたのである。

この日僕と対談した中野さんは非常に心
を悦ばせたと見へて愉快であつたのは、
多分常日頃色々煩悶や苦惱に患つらわさ
れた、氏の心中がこの二人の快談で幾分朗
かになられたのであらうと察せられた。



中野正剛

さてその次ぎの会見は、拙著の題字を書
いて貰つた時の、同年八月某日暑い日盛り
の日であつた。噫思へば、この日こそ、僕
が中野さんに地上で最後に御眼にかかつた
痛ましき記念すべき日であつたのだ。

その日は折よく来客も少なく、応接で二
人だけでお会ひしたが、心なしか、この時
中野さんの元気が余り良くなかつた。

氏は僕の顔を見るなり、
「どうもあなたから頼まれた、序文を書こう
と思つたが、仲々書けなかつたが、どうだ
らう、実は洵に良い句を見付けたから、題
字を書くが、それで勘弁して貰へぬだらう

か。」

僕曰く、結構です、どうぞよろしくと申すと、氏は直ちに筆を執つて色紙に雄渾な筆勢で左の文字を認めて下だすつた。

匹夫而為百世之師、「四夫ニシテ百世ノ師トナリ」

一言而為天下之法 「一言ニシテ天下ノ法トナル」

(蘇東坂の句である)

題寺島君立言、耕堂止剛

氏曰く、「どうだ、良い句じゃないか。」

僕曰く、「洵に良い句です。お陰で僕の本も価値を高めます。」と厚く礼を述べ、それからまた、例に依つて時局談をお聴きしたり、また話したりしたが、この日中野さんは先日ほどの熱がなかつた。

思へばこれが中野さんと僕との現世に於ける最後の会見となり、またその題字が僕に取つては同氏の絶筆となつてしまつたのである。嗚呼、昭和の佐久間象山たり、吉田松陰とも謂ふべき、日本の至宝中野正剛氏はこの後二ヶ月を経た十月二十六日の深夜、遂に東條一派弾圧の前に割腹自刃されたことは真に悲痛断腸の恨事であつた。噫。

昭和十八年十月二十七日午後五時頃、その日の夕刊で氏の自裁を知つて僕は、直ちに中野邸へ駆け付け、丁度検視を終はつた直後であつたので、割腹された八畳の寢室

に上向きに横臥されていた同氏の御遺骸に拜礼し、枕頭に端座してゐた末子泰雄君に白布を取つて貰つて、死の御顔を拝したが飽くまで澄み切つたその顔のおだやかさ、口辺には僅かに微笑でもされたかのやうな、けだけさ、僕は乃木將軍の最後も斯くやと思はれるほどの崇厳さにうたれて、しばし茫然として動ごけなかつた。

連載 大亜細亞医学の中の日本④ 坪内隆彦

わが国最初の医療制度「医疾令」

大宝元(七〇一)年、藤原不比等らによる編纂によつて大宝律令が成立した。不比等らは、その後も律令の撰修(改修)作業を継続していたが、養老四(七二〇)年に不比等は死去、撰修はいったん停止することとなった。その後、孝謙天皇の治世の七五七年五月、藤原仲麻呂の主導によつて新律令が施行されることとなつた。これが養老律令である。

わが国最初の医療制度「医疾令」は、大宝律令の中で定められたものである。医療関係の職員の任用、考課、諸学生の教育、課試、薬園の運営、採薬、投薬などを細かく規定している。典薬頭、医師などの職名をはじめ、医事関係の多くの用語は、ここに始まっている。

復原逸文の訳(『日本思想大系 三 律令』)

の一部を紹介しておく。

・医博士条

医博士(Ⅱ 医術教官)は、医人(Ⅱ 医師)のうち、学識技能が優長な人を任用すること。按摩・咒禁の博士もまたこれに準じること。

・医生等取薬部及世習学条

医生・按摩生・咒禁生・薬園生(Ⅱ)は、まず薬部(Ⅱ いわゆる部ではなく、薬師の姓を持つ諸氏が世襲している医術職)、及び、世習(Ⅱ 三代以上にわたつて医業を受け継いでいる家)を任用すること。次に庶人の、年齢十三歳以上十六歳以下で聡明な人を任用すること。

・医針生受業条

医針の生は、各経(Ⅱ 書物)ごとに授業の単位とすること(※以下、列挙されるのは履修書名)。医生は、甲乙、脈経、本草を習うこと。兼ねて(Ⅱ 選択科目として)、小品、集験等の薬方を(Ⅱ 一)習うこと。針生は、素問、黄帝針経、明堂、脈決を習うこと。兼ねて、流注、偃側の図、赤烏神針等の経を習うこと。

・医針生初入学条

医針の生は、初めて学に入ったならば、まず(医生は)本草、(針生は)脈決、明堂を読むこと。本草を読んで、薬の効能・性質を習得すること。明堂を読んで、図を検討し、その孔穴(Ⅱ ツボ)を習得すること。脈決を読んで、(針生が)互いに診察しあつて、時間帯による脈の状態変化を習得すること。次に、(針生は)素問、黄帝針経、(医生は)甲乙、脈経を読むこと。みな精通しておくこと。兼ねて(Ⅱ 選択科目として)教習する(Ⅱ 二つの)授業も、それぞれ通熟しておくこと。

・医生教習条

医生は諸経を習熟したならば、授業を分けて教習させること。総数二十人の割合にして、十二人に体療(Ⅱ 成人の一般診療科)を学ばせること。三人に創腫(Ⅱ 腫瘍科)を学ばせること。三人に少小(Ⅱ 未成年の一般診療科)を学ばせること。二人に耳、目、口、歯を学ばせること。おのおのその授業を専攻すること。